

## はじめに

このタイムラインは、福島原発事故にまつわる様々な記録・出来事に、片っ端から発生日時を刻印し、ばらばらにしたうえで、発生順に組み直したものである。

遠く離れた別々の場所で起きた様々な事象を「時刻」という横串を通して束ねたことで、レベル7という最悪の原子力発電所事故に住民が逃げ惑っていたあの瞬間瞬間に、福島第一原発では実際のところ何が進行し、東電や官邸はどう対処しようとし、周辺自治体はどう判断したのかを、複層的、立体的に捉えられるようにしている。

例えば、福島第一原発2号機が異常をきたしていた2011年3月14日22時00分、原発の西北西二十数kmに位置する福島県葛尾村は村所有のバスや公用車を使い、村民を福島市のあづま運動公園に避難させた。浪江町の西病院では取り残されていた患者の避難がようやく完了。原発の真西四十数kmの三春町では放射性ヨウ素から甲状腺を守る安定ヨウ素剤を住民に配布しようと課長会の議論が始まった。一方、東京の官邸ではその頃、松永和夫経済産業事務次官が5階の廊下を行き来。寺田学首相補佐官は、海江田万里経済産業相が「松永次官も東電の撤退を言いに来ているんだよ」とつぶやくのを聞く。

4分後、福島第一原発の担当者から事故収束に欠かせないバッテリーの結線作業をする技術者が足りないとの報告が入った。さらに、その3分後には福島第二原発の増田尚宏所長が「水をなんとかしてもらわないと2F(福島第二原発)は危ない」と、水を運んでくるよう東電本店に要請。清水正孝東電社長は「どうして今頃、そんなこと言うの？ 前から分かってんの、そういうの」と怒った……、という具合に、事実の折り重なりが延々と続く。

タイムラインの原型は、朝日新聞の長期連載「プロメテウスの罠」の担当デスクだった2011年12月に作った、幅42cm、長さ16mの巻物だ。木村英昭が担当した第6章「官邸の5日間」のデスクワークにあたり、驚愕の事実を時間的組み合わせで探ろう、東電のこれまでの発表や政府事故調の報告書の矛盾点を明らかにしよう、と思い作成した。

連載は好評を博して終了し、木村記者は余勢をかって『検証 福島原発事故 官邸の一〇〇時間』(2012年、岩波書店)を執筆した。一方、巻物のほうはその後ほこりをかぶっていたが、連載「プロメテウスの罠」の松本仁一顧問と依光隆明キャップの「もっと活かしようがあるのではないか」との助言を受け、あの「広辞苑」のデジタル化に携わった岩波書店の渡辺勝之編集人に会い、このたびの刊行に結びついた。

木村は「これを入れましょ、あれも入れましょ」と次々とデータを追加した。それをITに強い小林剛があっという間に並び替え処理して骨格をつくり上げ、渡辺が書物として編んだ。どんなビッグデータにも物怖じせず喰らいつく木村、小林、渡辺の3名との融合がなければ、本書は完成しなかったであろう。巻物作りのときのように紙を貼り合わせてはいないのでよく分からないが、やってみたら幅は数m、長さは100mを超えるのでないか。

あの日、日本中の人々が、それぞれの場所で原発事故を見つめ、おののき、避難し、あるいは事故収束作業に当たった。みな懸命で、真剣だったゆえ、自分の周り以外でいったい何が起きていたのか、意外と知らないで今日を迎えているように思う。通読のうえ、あの福島原発事故は何だったか、改めて考えていただけたら幸いである。

2013年8月15日  
宮崎知己

## 目 次

はじめに

凡例

2011 年 3 月 11 日 .....	1
2011 年 4 月 13 日 .....	173
2012 年 .....	263
原発関連年表 .....	321
参考文献 .....	325
あとがき .....	327

装丁=成瀬 慧

3月11日

3 / 11 14 : 46

宮城県北部で震度7の地震。震源地は三陸沖で、マグニチュードは観測史上最大のM8.8。3月13日にM9.0に訂正。地震発生時、福島第一原発の1号機～3号機は通常運転中で、4号機～6号機は定期検査中。第一には6415人、第二には2360人がいた。福島第一原発は15時49分までに外部電源が地震の揺れで喪失した。〔B2〕

〔F〕1号機で核分裂反応を止める制御棒が自動的に原子炉に緊急挿入(スクラム)される。〔東電〕

原子力安全委員会は、地震発生後、緊急事態応急対策調査委員に一斉メールで待機を呼び掛ける。連絡要員として安全委員会の事務局職員1人を経産省緊急時対応センターに派遣。安全委員会事務局は25人の緊急事態応急対策調査委員らに協力を要請したが、この日参集したのは4人。〔政府〕

菅直人首相は参院決算委員会に出席中。天井のシャンデリアが大きく揺れた。菅首相はいすのひじかけを両手でつかみ、天井を見上げた。自民党本部の窓ガラスが割れる。〔B〕

東京消防庁が震災非常配備態勢を発令する。〔S8〕

東電の清水正孝社長は電事連会長として奈良県で平城京遷都1300年記念事業を視察中。清水社長ら3人は3月10日午後、2泊の予定で奈良市のホテルにチェックイン。3月11日には夫人同伴で東大寺(奈良市)のお水取り観賞が予定されていた。勝俣恒久会長は「第10回愛華訪中団」の団長として北京に滞在中。団員には「週刊文春」元編集長、「週刊現代」元編集長、毎日新聞や西日本新聞、信濃毎日新聞のOB、中日新聞相談役ら26人が名を連ねていた。〔B6〕

3 / 11 14 : 47

〔F〕放射能を含む蒸気を原子炉内に閉じ込めるため、1号機の主蒸気隔離弁(MSIV)を閉にして原子炉からタービンへの蒸気の供給を遮断し、タービンが自動的に止まる。非常用ディーゼル発電機(D/G)の1Aと1Bが自動起動。〔東電〕

〔F〕核分裂反応を止める制御棒が自動的に2号機の原子炉に緊急挿入(スクラム)される。放射能を含む蒸気を原子炉内に閉じ込めるため、原子炉からタービンへの蒸気の供給を遮断し、タービンが自動的に止まる。非常用ディーゼル発電機(D/G)の2台(2A、2B)が自動起動する。〔東電〕

〔F〕核分裂反応を止める制御棒が自動的に3号機の原子炉に緊急挿入(スクラム)される。放射能を含む蒸気を原子炉内に閉じ込めるため、原子炉からタービンへの蒸気の供給を遮断し、タービンを手動で止める。〔東電〕

〔F〕5号機の非常用ディーゼル発電機(D/G)2台が自動起動する。〔東電〕

〔F〕東電が、交流電源で動く国の緊急時対策支援システム(ERSS)にプラントの監視に必要なデータを送信できなくなる。バックアップ用の電源への接続に必要なケーブルの調達に失敗して、送信が停止した。〔東電〕

〔F〕6号機の非常用ディーゼル発電機(D/G)3台が自動起動する。〔東電〕

3 / 11 14 : 48

〔F〕定期検査中だった4号機の非常用ディーゼル発電機(D/G)の1台(4A)を除き、3号機と4号機のD/Gが自動起動する。〔政府〕

〔F〕新福島変電所の断路器が損傷。福島第二原発で、富岡線2号線からの受電が停止する。富岡線1号線と岩井戸線2号線からの受電は継続。福島第二原発の外部電源設備は富岡線2回線、岩井戸線2回線の計4回線で、地震発生前は点検作業で停止していた岩井戸線1回線を除く3回線で受電していた。〔政府〕

〔F〕富岡変電所への送電が停止。富岡変電所に電気を供給する送電線が地震動に伴い高圧放電を起こしたため。〔政府〕

〔F〕福島第二原発の各中央制御室で、核分裂反応を止める制御棒が自動的に原子炉に緊急挿入(スクラム)されたことが確認される。〔東電〕

菅直人首相と全閣僚が出席して審議中だった参院決算委員会で、鶴保庸介決算委員長が両手を机につき、体を支えながら、「机の下へお隠れください」。

3 / 11 14 : 49

〔F〕14時49分までに、外部電源が喪失する。〔政府〕

気象庁が岩手、宮城、福島、青森、茨城、千葉の太平洋沿岸などに大津波警報を発令する。各地で死傷者や不明者が出る。

3 / 11 14 : 50

〔F〕2号機の原子炉への注水ポンプが停止する。運転操作員が原子炉隔離時冷却系(RCIC)を手動で起動する。〔政府〕

菅直人首相が出席する参院決算委員会が休憩。鶴保庸介決算委員長が「暫時休憩をさせていただきます」と宣言。伊藤哲朗内閣危機管理監が、地震対応に関する官邸対策室を設置する。関係各省の担当局長らで構成する緊急参集チームのメンバーを招集する。官邸対策室は、危機管理の最高レベルの組織。〔B2〕

3 / 12 04 : 12

新潟県中越地方を震源とする地震が発生する。新潟県十日町市などで震度 4。

3 / 12 04 : 20

①F 1号機への注水作業をしていた下請け会社(協力企業)の南明興産社員がいったん免震重要棟に戻る。1号機のタービン建屋付近の放射線量が上昇したため。1~4号機側の防護本部脇に津波で故障した消防車があり、そこから水を南明運用の消防車に補給し、原子炉に注水しようとしていた。南明は社員に委託業務外の危険な作業をさせることになるため、注水作業に従事することに難色を示す。だが、福島第一原発の対策本部は、東電社員の中に消防車の運転操作をできる者がいないため、「東電社員で組織された自衛消防隊の人間も同行するので、引き続き南明から消防車の運転操作をできる者を出して注水作業を手伝って欲しい」と要請、南明も応じる。(政府)

①F 4時20分から5時にかけて、運転操作員は2号機の原子炉建屋地下1階の原子炉隔離時冷却系(RCIC)室に向かい、現場で作業する。高線量下での作業時に身につけるC装備と全面マスクを着用。RCIC室は長靴の高さくらいまで水が溜まり、高温多湿の状態だった。運転操作員はRCIC室に入ると、懐中電灯を照らしながら、RCICの水源を復水貯蔵タンクから圧力抑制室(S/C)に切り替えるため、手で三つの電動弁を操作する。原子炉が停止したときの余熱を除去する残留熱除去系(RHR)が機能していないため、S/Cを水源としてRCICを作動させれば、循環する蒸気が十分冷却されず、S/Cの水温と圧力が上昇する事態が予想できたが、3月14日4時30分頃までS/Cの水温も圧力も監視されなかった。(政府)

3 / 12 04 : 23

①F 福島第一原発正門付近でモニタリングを実施して0.59 $\mu$ Sv/hを計測する。4時頃の計測よりも放射線量が上昇。(政府)

3 / 12 04 : 24

千葉県東方沖を震源とする地震が発生する。千葉県銚子市などで震度 4。

3 / 12 04 : 28

①F 7時に菅直人首相がヘリでグラウンドに降りるとの情報が福島第一原発の対策本部に入る。保安班がヘリの着陸地点を探すために、免震重要棟とグラウンド間のサーベイを開始する。(東電)

3 / 12 04 : 30

4時30分前、危機管理センターでの地震対応を終えた福山哲郎官房副長官が、官邸地下の「中2階」にいた保安院の平岡英治次長、原子力安全委員会の班目春樹委員長、東電の武黒一郎フェローに、「ベント、できました?」と尋ねる。「まだです」との返事に、福山が「何でできてないんですか。3時にやるって言ったのは皆さんじゃないですか!」「ベントしないと爆発するんじゃないんですか」と声を張り上げる。ベントが実施されていないことを初めて官邸中枢の政治家が把握した。(B2)

①F 余震による津波の可能性を考慮した吉田昌郎所長が、各中央制御室に対して現場操作の禁止を指示する。(政府)

①F 保安院が、1号機格納容器内の圧力が設計値の2倍を超えたと発表する。

福山哲郎官房副長官が、官邸5階にいた枝野幸男官房長官に福島第一原発のベントが実施されていないことを報告する。細野豪志首相補佐官も同席。報告後、福山は地下の危機管理センターに戻る。(B2)

東京消防庁の新井雄治総監が緊急消防援助隊の災害時派遣医療チーム(DMAT)連携隊を宮城県に派遣する。(SB)

東京消防庁の新井雄治総監が緊急消防援助隊の消防ヘリ「はくちょう」「つばめ」を宮城県に派遣する。(SB)

3 / 12 04 : 32

新潟県中越地方を震源とする地震が発生する。長野県栄村で震度 6 弱。

3 / 12 04 : 39

①F 福島第一原発の対策本部が警報を80 mSvにセットした線量計を中央制御室に届ける。現場作業にあたる社員の被曝線量限度を法令で定める100 mSvとしたため。(東電)

3 / 12 04 : 44

新潟県中越地方を震源とする地震が発生する。新潟県十日町市などで震度 4。

3 / 12 04 : 45

①F 福島第一原発の対策本部が、100 mSvにセットした線量計と全面マスクを中央制御室に届ける。(東電)

福島県沖を震源とする地震が発生する。福島県田村市で震度 4。

3 / 12 04 : 47

死者は9都県で178人、行方不明者は7県で584人。4時現在。警察庁が発表する。

秋田県沖を震源とする地震が発生する。青森県五所川原市などで震度 4。

3 / 12 04 : 51

岩手、宮城両県の海岸沿いを走る大船渡線など3路線の計4列車と連絡が取れない、とJR東日本が発表する。

3 / 12 04 : 53

②F 福島第二原発2号機の原子炉隔離時冷却系(RCIC)が自動停止する。原子炉圧力低下に伴う運転停止。(東電)

かった。ほかの隊員4人が、5tの給水タンク車2台で続いた。3号機近くの給水ポンプ横に停車。ドアを開けようとした瞬間、爆発が起きた。ドーンという低い爆発音とともに爆風で車ごと吹き飛ばされた。(B1)  
福島県の相双保健所(南相馬市)からいわき光洋高校に向けて双葉病院の患者を搬送していた陸自第12旅団輸送支援隊は、福島第一原発3号機の爆発の情報を知り、東北道郡山インターチェンジ経由でいわき市へ向かうルートを使うことにする。(政府)

3/14 11:02

**TV会議** 東電本店の担当者は吉田昌郎所長の3号機爆発の報告に、「11時1分、了解。緊急連絡いたします」と応答。小森明生常務は「現場の人、退避。現場の人、退避」と指示。清水正孝社長は「緊急に関係箇所連絡して。緊急連絡」と発言。

3/14 11:03

11時3分過ぎ、福島第一原発3号機の爆発をテレビで知った福島県浪江町の馬場有町長は、隣の二本松市に3月15日から自主避難することを決める。(B1)

3/14 11:05

**TV会議** 福島第一原発保安班が、緊急時対策室で、中性子が検出されていると報告。0.02 $\mu$ Sv/hで今後も監視すると発言。ガンマ線は40 $\mu$ Sv/hと報告。

3/14 11:09

**TV会議** 東電本店の担当者が「線量測ってて、ガンマ線は変わらないけど、中性子がちょっと出ている」と発言。小森明生常務も「中性子がちょっと出ている」と発言。続いて本店の担当者が「なんでかいな、あれ。1号の時よりも」と発言。

3/14 11:14

東電での福島第一原発に関する会見中、記者から「3号機から黒い煙が上がって、爆発したという情報がある」と伝えられる。東電の担当者は「すぐ確認して戻る」と会見を中断。15分後に「11時1分に3号機が爆発した」と発表する。

3/14 11:17

**TV会議** 東電本店の清水正孝社長が「そうすると、2号もあれか」と話す。

3/14 11:20

**TV会議** 吉田昌郎所長が電話で、「3号機11時15分のパラメータを取った結果、格納容器は健全であるというふうに判断しております。従いまして、1号機の事象とほぼ同等というふうに考えています」と話す。東電本店の小森明生常務がこれに対し、「しかし、何かちょっと。炉圧が」と話す。

3/14 11:21

**TV会議** 吉田昌郎所長が、3号機について、格納容器と圧力容器の健全性に問題はなかったと判断すると改めて発言。「測定の結果、中性子線は検出されていません」「この免震重要棟の中ですが」。

保安院が福島第一原発から南5kmの立ち入り禁止命令を出す。(国会)

3/14 11:23

NHKが11時1分に起きた福島第一原発3号機爆発事故を報道。11時8分の原発映像を流す。(B8)

3/14 11:28

**TV会議** 福島第一原発総務班が、3号機の爆発で40人くらいが行方不明、1名が脇腹を押しえうずくまっている、と報告。

3/14 11:30

**TV会議** 福島第一原発3号機の爆発の表現をめぐり、東電本店の高橋明男フェローが、保安院が「水素爆発」と言っているから、それに合わせて「水素爆発」としようと提案したことについて、清水正孝社長が「はい。いいです。これでいいから。スピード勝負」と発言。

3/14 11:35

東北電力が「東北6県と新潟県内の管内全域で計画停電を検討」と発表する。

3/14 11:38

**TV会議** 東電本店の小森明生常務が、保安院からは、モニタリングをせよという指示と、福島第一原発の南5kmに立ち入るなという指示がある、と指摘。吉田昌郎所長は「モニタリング優先だと思います」と発言。

**TV会議** 東電本店の担当者が「南明隊は無事です」と報告。

3/14 11:39

**TV会議** 吉田昌郎所長が、1/2号機、3/4号機、5/6号機の中央制御室の運転操作員が全員無事と報告。

**TV会議** 福島第一原発総務班が、3号機爆発による行方不明者は東電社員1、自衛隊を含む協力会社7の計8人と報告。

3/14 21:41

TV会議 東電本店の担当者が2号機の炉圧や炉水位が変わっていないことに気付き、主蒸気逃がし安全弁(SR弁)がちゃんと開いた状態になっているかと尋ねる。「バッテリーがへたって閉じたりしてませんか?」。

3/14 21:42

TV会議 福島第一原発の担当者が、2号機で主蒸気逃がし安全弁(SR弁)を二つ開けておくとバッテリーの消耗が激しいことが予想されるので、SR弁を1個開けた状態に戻してもよいかと尋ねる。東電本店の担当者は「えっと、いい考えだと思います」「もうちょっと水位を回復してから外しますか?」と応答。

3/14 21:44

TV会議 東電本店保安班が、福島第二原発の北側にあるモニタリングポストMP1の指示値が760nGyになったと報告。「1F(福島第一原発)の影響しかないだろう。違うの? そういうことじゃないの?」(武藤栄副社長)。

3/14 21:45

保安班が会見で「2号機は炉心損傷の可能性が高い」。(国会)

3/14 21:54

TV会議 東電本店の高橋明男フェローが清水正孝社長に向かって、バッテリーについて「もともとは50個用意したはずなんです」と説明。清水社長は「いやあ、はずはいいんだけど」と応答。

3/14 21:55

TV会議 福島第二原発の増田尚宏所長がモニタリングポストMP1で毎時 $1.2 \times 10^4$ nGy(毎時9.6 $\mu$ Sv)を観測したと報告。

東電の藤本孝副社長が会見を開き、3月15日以降の計画停電について説明し、「ご迷惑をおかけして大変申し訳ない」と述べる。

3/14 21:58

TV会議 東電本店の担当者が格納容器雰囲気モニター(CAMS)のガンマ線線量率を評価したところ、2号機の炉心損傷の程度は5%以下と評価できると報告。

双葉病院に詰めていた双葉署副署長は、福島県川内村役場に設置された双葉署緊急対策室から「原子炉が危険な状態であるから、現場から一時離脱せよ」との指示を無線で受ける。院長らを警察車両に乗せて川内村下川内の割山峠(543m)まで退避する。(政府)

3/14 22:00

TV会議 福島第一原発の担当者が、2号機のウェットベントラインについて「AO弁の小弁が微開か中間開で開いています。バタ(フライ)弁なので、流量が上がればもっと開くので、ラプチャーディスク(破裂板)が割れるのを待っている」と報告。

TV会議 福島第一原発の担当者が、2号機はもしかしたらもうベントが行なわれたかもしれないと半信半疑の見解を示す。ドライウェル(D/W)の圧力が0.480MPaでずっと同じであること、21時30分過ぎに福島第二原発のモニタリングポストの放射線量値が急に上がったことを理由としている。

西病院(福島県浪江町)の患者の避難が終了する。患者とその家族は自衛隊のヘリ2機で福島県立医大病院(福島市)などに搬送された。警察のバスとパトカーで最後に残った10人と医療スタッフの避難。避難終了までに3人が死亡。(国会)

22時以降、福島県葛尾村は、村所有のバスや公用車などを使い、福島市のあづま運動公園に避難する。(政府)

官邸5階の廊下を松永和夫経済産業事務次官が行き来する。寺田学首相補佐官は、海江田万里経産相が「松永次官も東電の撤退をいいにきているんだよ」とつぶやくのを聞く。(B1)

福島県三春町の課長会議が始まる。場所は、役場の庁舎から200mほど離れた保健センターで、そこには県から調達した安定ヨウ素剤が運び込まれていた。深谷茂副町長ら数人がいすに座り、何人かがカーペットの上に車座であぐらをかく。深谷が会議を仕切った。保健福祉課長の工藤浩之がカーペットに体育座りで安定ヨウ素剤について説明する。(B1)

3/14 22:04

TV会議 福島第一原発の担当者が、人海戦術でバッテリーを中央制御室に運んで結線する作業がものすごい負荷になっているので、他の原発の電気・計装担当者に応援に来てもらいたいと要望。

3/14 22:07

TV会議 福島第二原発の増田尚宏所長が「水がまったくない」と報告。「水をなんとかしてもらわないと2Fは危ないので、もう船で持ってきていただいても結構なので水をください」。

2F モニタリングポストMP1で5 $\mu$ Gy/hを超える放射線量を計測したことから、東電は原災法第10条第1項の規定に基づく特定事象(敷地境界放射線量上昇)が発生したと判断する。線量が上昇した原因は、大気中に放出された放射性物質の影響によるものと推測。(東電)

棄物の行方など「核のゴミ」を追う。

映画『傍 3月11日からの旅』(いせフィルム [監]伊勢真一 115分)いきいきプラザ一番町(東京都千代田区)で上映。東日本大震災から4日後、カメラマン宮田八郎は、宮城県亶理町に住むミュージシャン苫米地サトロの安否を尋ねる。それから1年、月命日前後に亶理町と友人が暮らす福島県飯館村に通い続ける。苫米地は妻たちと亶理町で臨時災害放送FM あおぞらを開設した。

### 3月12日

福島県双葉町の井戸川克隆町長が、中間貯蔵施設の受け入れ条件を示す。保管期間の30年から20年への短縮や東電の責任を明確化することを求める。

東京都民が受けた水道水や食品による内部被曝線量が、全身への影響で乳児48 $\mu$ Sv、成人18 $\mu$ Svとの推計結果を、東大の沖大幹・生産技術研究所教授と村上道夫特任講師らがまとめる。

テレビ『BS世界のドキュメンタリー シリーズ原子力の残痕 イエローケーキ ウラン採掘の現場から Yellow Cake: The Dirt Behind Uranium』(Um Welt Film Produktions [監]ヨアヒム・チルナー 2010年独 49分)NHK-BS1で放送。2012年1月に劇場公開されたドキュメンタリー映画の短縮版。核燃料として使われるウラン採掘の裏側を暴く。

### 3月13日

文科省が、2011年6月から東日本で進めた約2200地点(福島第一原発から半径100km圏内)の土壌調査の報告書をまとめる。148万Bq/m<sup>2</sup>を超える高濃度の地域は、福島県では原発から帯状に北西方向に延びる地域を中心に34地点で確認された。チェルノブイリ原発事故と比べて汚染が及んだ距離は8分の1程度だった。

政府が3月末に実施予定の避難区域の再編について、放射線量が高い地域を抱える市町村の区域見直しを4月以降にずれ込む見直しになる。

保安院が関西電力大飯原発のストレステスト妥当の判断を原子力安全委員会に報告する。[⑥7](#)

JAグループ福島の要請集会が国会内で開かれる。

大阪府が約半年間中断していた架橋工事を再開する。福島県郡山市で造られた橋桁の設置に対して大阪府河内長野市の住民が放射能汚染の不安を訴えたため中断していた。福島県内で除染した鋼材の放射線量は最大で1.5mSv/年から同0.1mSv/年に下がった。

米原子力規制委員会(NRC)のヤツコ委員長が、国内の原発の安全対策の規制を強化する方針を明らかにする。

### 3月14日

原子力損害賠償紛争解決センターが、弁護士費用は和解金額の3%を目安に東電に負担させることにする。

国会事故調が参考人として東電の武藤栄前副社長から意見聴取をする。

神戸大などの調査で、福島第一原発から約50kmの福島県いわき市の海岸で採れた海藻中の放射性セシウムが、数カ月の間に20分の1~70分の1と急速に減っていることが分かる。

福島県浪江町の復興検討委員会が、ほかの自治体の中に町民が集まって暮らす「町外コミュニティ」を整備する案をまとめる。

日経平均株価が終値1万円台に回復する。7カ月半ぶりの大台。

### 3月15日

原爆や被爆者をテーマに作品を描いてきた長崎市の漫画家西岡由香が、原発をテーマにした漫画「さよならアトミック・ドラゴン」を出版する。

### 3月16日

東電が福島第一原発4号機の原子炉の映像を初めて公開する。

原子力損害賠償紛争審査会が、自主避難地域の福島県23市町村の住民に一律8万円としていた賠償額を、今後は東電が住民の事情に応じて個別に決める方針を固める。

枝野幸男経産相が閣議後の記者会見で、東電が福島原発事故後に菅直人首相(当時)の訪問を受けた際の録画映像を公表していないことについて、「なぜ公開しないのか意味不明。映像を持っている東電は公開すべきだ」と述べる。

福島県大熊町が、2017年を目標に役場機能や小中学校などの教育施設を現在の福島県会津若松市から、いわき市か同市周辺町村へ移す案を第1次大熊町復興計画の素案に盛り込む。

福島県大熊町が、同県いわき市周辺で2014年から「仮の町」を整備するとする復興計画の素案を決める。

大飯原発の「地元」について、藤村修官房長官が「滋賀は含まず」と述べる。橋下徹大阪市長は「地元同意は関西

## あとがき

本書は時系列表である。形容詞や書き手の主観的な表現を削ぎ落として、あったファクト(事実)だけを時間順、日付順に淡々と並べた。同時に、そこに何を入れ込むのか、何を削るのか、それら取捨選択された事実は、私たち編者の行為を通じて選別されている。主観的な表現を排して、取捨選択した事実から、読み手に書き手の意図を伝えるのがルポルタージュの手法であるとするならば、本書は東日本大震災の発生から2012年末までの福島原発事故のルポである。基礎資料であると同時に、「読める時系列表」を目指した。本書を手にとった方々が、乾いた事実の羅列の中に、怒り、悲しみ、戸惑い、喜びといった人々の感情の発露を読み解いていただけるなら、私たちが本書に託した思いの一端は果たせたと思う。

〈その時〉、私たちはどこにいたのだろうか。隔絶され、混乱する情報の中で、見聞きできるものは限定されていた。私もそうだった。私は地震発生直後から東京電力本店に詰めた。詰めたはいいが、次第に原発のコントロールができなくなり、東電本店は原発取材の主戦場の一つになっていった。通信状態が悪く、朝日新聞の本社とのリアルタイムのやりとりもできなかった。今、被災地で何が起きているのか、政府はどのように対応しているのか、分からない。かろうじてつながったパソコンの通信を使って送る東電本店発の原稿やメモがどのように紙面で使われたのかも十全に把握できなかった。自分はいったいどこにいるのか、自らの立ち位置が揺らぐ不安は、体験した者にしか分からないだろう。経済グループ(現在の経済部)の国際経済担当デスクだった宮崎知己も、かつて東電を担当していた経歴もあって、震災翌日の3月12日深夜から現場デスクとして東電本店に詰め、経済部の記者たちを束ねた。余談だが、私と宮崎はここで初めて互いの顔を知る。

読者の皆さんはどうだったでしょうか。〈その時〉、あなたはどこにいて、何をしていましたか。

「自分の時間」を本書と重ね併せてほしい。〈その時〉、東電や政府が何をしていたのが判明するに違いない。「時間」の持つ意味を初めて本書で知ることになるかもしれない。

私たちは容易に記憶の上書きをしてしまう。それを「記憶の風化」と語る人もいるが、本書がそれに抗う武器になれば編者としても嬉しい。

本書は、私たちの必要性から生まれた、と言える。

2012年、私は、朝日新聞朝刊3面の長期連載「プロメテウスの罠」で、第6シリーズ「官邸の5日間」(2012年1月3日付開始、計35回)を担当した。変転するプラントの異常事態は複合的に重なり、その時、官邸がどのような動きをしていたかを整理する必要があった。時系列表は3種類を活用した。一つは、取材の過程で入手した政府関係者が内部用に作成していたものだ。公になっていない。これは全体を俯瞰するためによく使った。もう一つは、それよりも詳しい事項を整理したもの。これは宮崎が作った。事項を印字した紙をのりで貼り合わせてくるくると巻いたその形状から、宮崎はこれを「巻物」と呼び、「桐箱に入れる」「一家にひとまき一巻」とたいそう喜んでいて。デスクワークはもちろん、自らが筆を執った第14シリーズ「吹き流しの町」(2012年7月7日付開始、計20回)でも威力を発揮した。この「巻物」よりも更に詳しい事項を確認する際は、取材を始めて間もない頃、開始前に自前で用意したものを使った。この作成に力を貸してくれたのが、当時、早稲田大学の大学院生だった小林剛だった。この時系列表は後に「官邸の5日間」を元に書き下ろした拙著『検証 福島原発事故 官邸の一〇〇時間』(2012年、岩波書店)の巻末時系列表に一部が生かされた。

時系列表は執筆やデスクワークになくしてはならないものだった。

「巻物」の宮崎、情報処理のスペシャリストである小林、「何でも入れちゃえ」の典型的文系脳の私という、三者三様の手によって、一人の力では到底成し得なかった時系列表がここに仕上がったと思っている。



本書は、国会、政府、東電の事故調査報告書、東電テレビ会議映像記録を主軸に、それらと、関連する報告書や書籍、新聞報道をばらばらに解体し、時間軸で再構成したものだ。そういう意味で、本書は万物の書物をのみ込む。時間の経過とともに、新しい事実も次々と発覚するだろう。その時はまた本書の出番だ。その事実時間に時間を付与することで、その事実の持つ意味を立体的に浮き彫りにするに違いない。本書が皆さんに受け入れられるなら、いつの日か増補改訂版を出せればと思っている。

それにしても、作業で圧倒的に苦労したのが政府事故調の報告書だった。主語の掛かり方が複雑で、一文がやたらと長い。繰り返しを示す「同」が多用され、専門用語を平気で並べたてる。悪文の典型的な事例集で、原子力の専門知識の乏しい層にも事故のことを理解してもらおうという姿勢は感じられない。「分かる者だけが読めばいい」という、睥睨として人を見下す傲慢な文章だ。書いた人間が物事の本質を十分に咀嚼していないと、平易な言葉は使えない。理解していないとやたらと難しい言葉や専門用語で逃げる。新聞記事もそうだ。政府事故調に比べれば、東電の報告書は格段に読みやすいが、それでもこちらでも専門用語をそのまま多用しているから、読み手に困難を強いる。政府や東電の事故報告書の文章をそのまま本書に掲載しても意味が通じない場合も多かった。編者の責任でできるだけ平易な表現に直したり、言葉を添えたりした。努力はしたが、それでも小難しい言葉が残ったかもしれない。ぜひ読者のご意見を賜りたい。国会事故調の報告書は多くの人に読んでもらおうという姿勢が読み取れる。官邸や東電の事故対応を巡るマネジメントの側面については、政府事故調の報告書と同様にその事実認定と結論についての瑕疵を見逃せないが、言語的には秀でた報告書だと言える。

言葉は、言葉を使う者の正体を暴く。

本書に携わって、原子力ムラをムラとして成り立たせている基盤はもしかしたら彼ら特有の体系化された言語ではないかと思った。ムラにはその言語が通じる者しか近寄ることができず、その言語を理解しようとしないうちは排除される。他者も言語が通じないから寄りつこうとしない。ムラに暮らす人間は分かった振りをすればいい。言語が通じなくなるとムラには住めなくなるからだ。その言語は外に開かれた言語ではないから、どんどんどんどん内向きになる。他者に分かりやすく説明する必要もないから、やがて使っている人間自身もその言語を構成する言葉の持つ本質的な意味を咀嚼する行為を放棄する。ムラに『広辞苑』は不要だ。ムラで使われる言語の正体は「排除の言語」だ。この言語にこそ、事故を誘発した遠因があるのではないだろうか。そんなふうにも思う。これは何も原子力ムラに限ったことではない。ムラはあちこちにある。この「原子力と言語」についての論考は別の稿で整理したい。ここでは問題提起にとどめる。

さて、時系列表の刊行を示唆してくれたのは拙著『官邸の一〇〇時間』の担当編集者だった。その本の巻末に付すために用意した時系列表が余りにも膨大な量になったため、物理的に全部を収録しきれなかった。その代わりに、「これだけで面白いので、時系列表として別に刊行しましょう」と提案してくれた。同時期、映像分野の専門家で、以前からの知り合いだった編集者の渡辺勝之さんも時系列表の重要さに目を付け、声を掛けていただいた。本書と同時に出版された東電テレビ会議映像記録の書籍(『東電テレビ会議 49時間の記録』)と相互乗り入れし、デジタル化と関連性を持たせるため、本書も渡辺さんの手によって刊行が進められることになった。

本書は、2012年末までを収録している。公表された国会や政府、東電の報告書を活用しないわけにはいかない。政治家の関連本も次々と刊行された。汚染水漏れ、補償問題、被曝隠し……福島原発事故を巡る動きは収まるどころか、拡散していった。ただ、初期の1カ月間でいかに様々な動きが折り重なっているかは、本書に占めるページ数を見れば明らかだろう。

膨大な資料と原稿をさばき、1冊に仕上げた渡辺さんの労苦を抜きに本書の刊行は成し得なかった。渡辺さんの机の上には、原稿とそれの元になる資料が文字通り山のように積み上がった。校正部の方々には、本書に磨きを掛けていただき、重要な指摘を数多くいただいた。渡辺さんと共同で本書の刊行を社内に提案していただいたのは現社長の岡本厚さんだった。著者を代表して、岩波書

店の皆さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

本書に収録した事項は約7000項目である。紙幅の関係で、どうしても収録しきれなかった事項も多い。それらは、後日、アプリ版で刊行される『原発事故データベース』に収める。これも渡辺さんが担当編集者として指揮を執る。検索機能についてはアプリ版に軍配が上がるが、一覧性と俯瞰性においては紙の出版物に勝るものはない。一覧性と俯瞰性にこそ、重要な“何か”を見つけるカギがある。この「読める基礎資料」が様々な場面や用途で活用されることを願う。なお、本書の刊行は当初の予定よりも遅れた。作業量の膨大さの故だったが、読者の皆さんには大変ご迷惑をお掛けしたことをここでお詫び申し上げます。

さて、本来ならここで筆を置くべきところだが、最後に私事を記させていただくことをお許し願いたい。

本書と、そして、本書と同時出版された『東電テレビ会議 49時間の記録』の刊行を一番に報告しなかったのが、村井吉敬さんだった。インドネシアを中心とした東南アジアの社会経済学が専門で、長く上智大学で教鞭を執っていた。その村井さんが2013年3月23日に69歳で亡くなった。私が駆け出しの頃から付き合わせていただいていた方だ。『エビと日本人』(1988年、岩波新書)など膨大な書籍や論文を著す一方で、インドネシアの民主化支援にも力を尽くしてきた。私の愚痴や泣き言を聞いてくれた人だった。くじけそうなきも、ひょうひょうとした語り口で励ましてくれた。村井さんと話しているうちに何だか自然とこちらの気持ちが奮い立ってきた。私にとっては最も手強い批評家でもあった。ジャーナリズムへの健全な批判者だった。大学時代はお世辞にも真面目な学生ではなかったものだから、今から思えば恩師のような存在だったのかもしれない。

亡くなったその日の夜、自宅を訪ねた。亡骸はすっかり頬が落ちていた。最後に会ったのは正月の3日だったので、病状の急変が窺えた。撫でた額に熱はなかった。我と彼との超えられない一線を突きつけられた。

村井さんの著作が亡骸のそばにある机に並べられていた。その中から、たまたま『スندا生活誌 変動のインドネシア社会』(NHK ブックス)という本を手にとった。読んだことのない本だった。奥付を見ると出版は1978年。村井さんの初めての著作だった。当時は早稲田大学社会科学研究所の研究員だったようだ。

ページをめくっていった。その場でめり込んだ。インドネシアの民衆の生活に溶け込み、市井の人々の息づかいが伝わってきた。何よりもインドネシアの人たちや文化への尊敬があった。読み進めるうちに、「なあんだ、村井さんは昔からちっとも変わってなかったんだなあ」と思った。亡骸の村井さんは、愛用したフィールドワーク用のベストを羽織り、そのベストの胸ポケットにはボールペンを刺していた。研究者としての駆け出し時代から、現場を大事にしていたんだなあ、と。同時に「こりゃあ、参った」と頭をかいた。よく取材している。本当によく現場を歩いている。民衆の知恵も、民衆の笑いも、そして民衆の狡猾さも、その本には詰まっていた。一人称とも読めるその文体は若き村井さんがインドネシアで闊歩する姿を生き生きと蘇らせた。その本に、ちょっと嫉妬した。もし私がいかにばかりかでも多少の仕事をしたとの思いがあるとするならば、鼻っ柱をへし折ってくれたと言えよう。

村井さんは私に課題を与えて逝ってしまったようだ。

村井さん、最初の答案用紙として、まずはこれら2冊の本を提出します。

先生、感想はいかがですか。

2013年8月19日  
木村英昭  
東京・神保町で